

篠養だより



「夢と希望を抱き 心豊かに たくましく生きる子の育成 ～ 明るく いきいきと ～」
 ◇丹波篠山市立篠山養護学校 ◇丹波篠山市沢田120-1 ◇tel 552-5237 ◇fax 552-6222
 幼稚部0名 小学部20名 中学部12名 高等部15名 計47名 早期発達支援室2名 総計49名 No.5

授業改善の視点! ~Less is more! 少なく教えて豊かに学ぶ!~

本校では、「一人一人が力を伸ばし活躍できる授業づくり～実態把握を起点とした指導の充実～」を研究テーマに、日々授業改善に取り組んでいます。6月9日(木)には、中学部、高等部の教員が研究授業を行い、放課後には全職員で事後研修会を開きました。そして、本校の自立活動担当が2人の教員の授業を分析評価し、その内容を互いに共有することで学びを深めました。子どもたちが学び合うように、教職員も切磋琢磨し、授業力の向上に取り組んでいます。

【自立活動担当より】

「今日の2人の先生の授業に共通していたことは何だと思いますか。私はどちらの授業もとても静かだったと思います。では、「なぜ、静かだったのでしょうか」その理由は、やることばかりして、子どもたちが授業の見通しを持ちやすかったからだと思います。また、課題設定が子どもの実態に合っていたことも要因の一つです。それと、もう一つの共通点は、授業が低刺激であったため、子どもたちが普段以上に落ち着いて、集中して取り組んでいたことです。具体的には、先生の声の大きさや話すスピードが適切であったこと。必要最小限の言葉数で、指示も明確であったことなどが、理由と考えられます…(つづく)」



個別の授業形態(中学部)



個別の授業形態(高等部)



集団の授業形態(高等部)

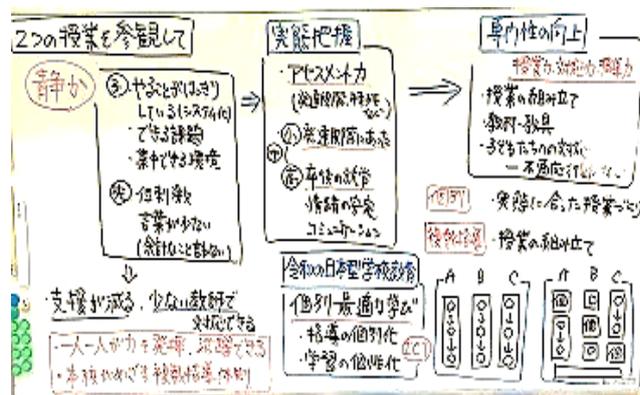
【職員の感想より】

○授業全般

- ・ねらいが明確でよかった
- ・視覚支援が適切であった
- ・授業がパターン化され構造化されていた
- ・必要最小限の支援、シンプルでよかった
- ・信頼関係に基づく授業であった など

○子どもの様子

- ・とても落ち着いていた
- ・集中していた
- ・離席はあったがすぐに戻ってきた
- ・授業が終わった後、生徒が「今日疲れたでも勉強頑張ったよ」と発言した など



「研究授業」後の事後研修会のまとめ

先日受講したオンライン研修の中で、埼玉県戸田市の教育長さんが、授業改善の視点に、「**Less is more! 少なく教えて豊かに学ぶ!**」を掲げ、全市的な施策を展開されていました。

視聴して、まさに本校のめざす授業スタイルと同じだなと共感したところです。また、「努力は夢中に勝てず、義務は無邪気に勝てない」、「教科のめがねを通して生活を見つめる」など、子どもの好奇心をくすぐり、キャリアの視点を持って授業を行うことの大切さについてもお話しされていました。ぜひ、そのエッセンスを、本校の授業実践に取り込んでいければと思います。

今後も、学校をあげて、授業力の向上に取り組んでいきます。

現場・施設実習が始まりました!~高等部全員、頑張っています!~

今週月曜(6/27)から、高等部生徒による現場・施設実習がスタートしています。実習初日は緊張していた生徒たちも、少しずつ職場の雰囲気に慣れ、事業所の皆さんに教わりながら、社会人としての体験を積んでいます。3年生にとっては、就労に向けた貴重な学びの場となります。残すところ、後1日となりましたが、数か月後の自分を想像し、最後まで精一杯取り組んでください。そして、働くことの喜びと厳しさの両面を味わってほしいと思います。

後になりましたが、コロナ禍にも関わらず、生徒たちのために、貴重な社会体験の場を提供して下さった事業所の皆様に、心より感謝申し上げます。



実習の様子①



実習の様子②

ネガティブ・ケイパビリティ ~答えの出ない事態に耐える力!~

ネガティブ・ケイパビリティ (Negative capability) とは、「どうにも答えの出ない、どうにも対処のしようのない事態に耐える能力」「性急に証明や理由を求めず、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」と言われています。

日本では、精神科医の帝木蓬生(ははきぎ ほうせい)氏の著書『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』を通して広く知られる概念となりました。

私は数か月前にこの言葉と出会い、今の世の中に「ピッタリ」の言葉だと思いました。

新型コロナウイルスによるパンデミック、ロシアによるウクライナ侵攻、それに伴う世界的な物価の高騰など、世の中の動きを見ても、これからの時代、答えの出ない事態や不測の出来事に耐える力が求められます。

こういった力は、誰もが否応なく社会から求められる力であると同時に、突き詰めれば、これからの未来を生きる子どもたちに必要な『生きる力』に直結する力とも言えます。

帝木蓬生氏は著書の中で、あるスクールカウンセラーの手紙を紹介していますが、今の時代に必要な大切なメッセージが含まれているような気がします。

校務員さんに感謝! ~篠養の“縁の下の力持ち”! いつもありがとう!~

つい先日のことですが、出張から帰ってきたときのこと。校長室の花瓶に赤・白・黄色の可愛い花が生けてありました。「カラー」という花でした。出張前後で室内の景色が変わったものですから、さすがに鈍感な私も変化に気づきました。そして、「これはきっと校務員さんだな?」そう思って尋ねてみると、やはりそうでした。直ぐに感謝のお礼をいいました。

校務員さんは、いつも早くから校舎内(玄関や廊下、職員室など)の掃除や給食配膳室の準備など、私たちが気持ちよく学校生活を送れるよう、見えないところで私たちを支えてくださっています。皆さんが毎朝登校して目にしている風景は、実は、すでに校務員さんが美しく掃除をされた後の風景なのです。

どんなことでも、当たり前姿の裏側には、誰かがその当たり前を保つ努力をしているものです。その裏側にある努力、心配りに気づける人になってほしいものです。校務員さんの心配りのお陰で、私たちが気持ちよく学校生活を送れるのです。まさに、篠養の“縁の下の力持ち”ですね。

この日は、汗の滴るような蒸し暑い日でしたが、花瓶の花を見ていると心が落ち着き、暑さもどこかに吹き飛んでしまいました。そして、この日、私はとても温かい気持ちになりました。校務員さんに、感謝、感謝です。



カラーの花